

中学校教育の社会科における埋蔵文化財の扱いについて

八木厚之

1. はじめに

私は、平成7年4月より、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターに赴任した。それまでは、教師として昭和59年4月より京都府船井郡日吉町立殿田中学校に勤務し、次いで昭和62年4月より京都府宇治市立宇治中学校に勤務していた。この11年間、教科は社会科を指導してきた。

中学校教育の社会科の指導形態は、ザブトン型・ π 型・さみだれ型の3種類がある。ザブトン型というのは、1年で地理的分野、2年で歴史的分野、3年で公民的分野を学習する形態である。 π 型というのは、1年と2年で地理的分野と歴史的分野を並行して学習する形態である。さみだれ型というのは、社会科の教師でも知っている人は少ない。これは、1年から3年まで、地理的分野、歴史的分野、公民的分野を並行して学習する形態である。現在の中学校では、 π 型で学習している。この π 型では、地理的分野と歴史的分野を結びつけて学習するため、生徒の理解がより一層深まるという利点がある。また、地理的分野では世界地理を先習し、次いで日本地理を学習する。「何故、世界地理から学習するのか」というと、小学校では日本地理しか学習しないので、中学校で発達段階に合わせて世界地理から学習するのである。

私は、大学では経営学部を卒業し大学のゼミナールでは教育学の研究を進めてきた。しかし、社会科が好きでその中でも特に日本史に興味、関心を持ってきた。そのような経緯もあり、当センターに異動してきた。

しかし、教師としての意識も依然として持ち続けている。そんな時に平成7年11月28日ある中学生が、藤ノ木古墳の内部に侵入し遺物を盗み出すという非常に衝撃的な事件が起こった。これを機に、中学校教育の社会科における埋蔵文化財の扱いについて、私の考えを述べたい。

2. 中学校教育の社会科の埋蔵文化財の扱いについて

歴史的分野の中でも、現在埋蔵文化財を資料として扱うことの多い縄文時代～奈良時代

について述べたい。

まず、縄文時代である。教科書には縄文時代の人々の生活の様子が、挿絵で描かれている。資料集等を使い縄文時代の人々の1年間の食生活を説明し、狩漁・採集が中心の生活を送っていたことを理解させる。また、縄文土器を模型や写真で紹介し、それを使用していたことをわからせる。しかし、教科書

藤ノ木古墳荒らされる

奈良 石棺に穴遺物は無事

二十八日午後二時半ごろ、奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺西二丁目、国史跡の藤ノ木古墳で、古墳石室入り口を覆っていたトタン小屋（高さ約二メートル、縦横五メートル）の扉がこじ開けられているのを同町職員が見つけた。

連絡を受けた同町教育委員会の職員が調べたところ、小屋の中では、石室入り口に積んでいた土のうが崩されていた。入り口が開けられ、石室内部にある石棺の一部が壊されており、奈良県警西和署に届け出た。同

署は文化財保護法違反の疑いで捜査を始めた。同署の調べでは、トタン小屋の扉の南京錠が、取り付け金具ごと引ききざりされていた。犯人は入り口に積んであった約百個の土のうを取り除いたあと、幅約二メートル、高さ約八十センチの鉄道（せんどう）から、石室内に侵入したらしい。石室内にあった石棺の蓋（ふた）部分が、ノミ状のもので幅約四十五センチ、高さ約三十五センチにわたって傷つけられ、幅約二十五センチ、高さ約七センチの穴が開けられていた。

石棺は長さ二百三十五センチ、幅百三十四センチ、高さ百五十二センチの凝灰岩でつくったくり抜き式家形石棺。内部にあった主な遺物は、発掘時に取り出され奈良国立文化財研究所で保存されているが、石棺の中には発掘調査内容を記したプレートと出土した二体の骨の一部が入った二つの骨壺（つぼ）が入っていた。同署では、石棺内の遺物が盗まれた形跡はないとみている。トタン小屋には警報機などは付いていなかった。藤ノ木古墳は国史跡で内

部に立ち入ることができないため、同署では二十九日、文化庁や同町と協議のうえ捜査する。斑鳩町教委によると、八月三十一日に古墳の草刈りをした時は、小屋に異常がないのを確認している。同古墳は国所有で斑鳩町が管理している。

平成7年11月29日付
朝日新聞

新聞記事

や資料集に遺跡発掘の写真が見当たらない。視覚に訴える物に慣れている現在の中学生にとっては、復元された竪穴式住居の写真とともに、発掘された竪穴式住居跡の写真を資料として使ったらどうであろうか。そうすれば、竪穴式住居が、半地下式の住居で風と寒さを防ぐという特徴がある北方系の住居であったと言うこと、また、住居の中での具体的な生活の様子を、より深く理解させられることができると思われる。

そして、弥生時代である。教科書に出てくる挿絵は大抵の場合、水田の中でたわわに実った黄金色の稲穂に囲まれ、石包丁で穂首刈りをしている収穫の様子である。背景には、

竪穴式住居と高床式倉庫が描かれている。資料集には、弥生土器、登呂遺跡の写真、水田跡の写真等が載っている。これらの資料により、弥生時代についての生徒の理解は深まるだろう。しかし、ここで遺構の図面も合わせて生徒に見せたらどうであろうか。掘立柱建物の柱穴の図面である。それも、発掘されたままの柱穴が、等間隔に並んでいない図面がよい。生徒は、現在の柱が正確に等間隔に並んだ建物しか知らないのも、このような図面を見れば不思議に思うであろう。しかし、柱穴が等間隔に並んでいないのに、高床式倉庫を建てられたことを知ると、弥生時代の人々の建築技術の高さに驚き、理解もさらに深まるであろう。

次に、古墳時代である。この時代では、教科書に必ずといってよいほど大山古墳や石舞台古墳の写真が出てくる。最近の資料集には、復元された古墳の写真が載っている。この写真を見ることにより、古墳というのは、ただ土を盛り上げた大きな墓という先入観を捨て去り、非常に緻密に造られた物であることを知るだろう。そして、古墳を造らせた者の権力の強大さを改めて理解させることができるだろう。

また、古墳時代後期の竪穴式住居跡の写真を資料として使ってもよいのではないだろうか。住居の中に竈が出現し、その傍らに貯蔵穴が作られ女性のための空間が出来たことを生徒にわからせる事ができるだろう。これを、女性の地位が現代社会のそれよりも高かったと考えたならば、公民的分野の基本的な人権の学習のひとつである、男女差別を無くそうとする意識を高める指導にも、活かせるのではないだろうか。

奈良時代以降は、埋蔵文化財の教科書、資料集等に登場する回数は極端に減少する。これは、現存する建物等が多くなっていくと思われる。奈良時代の資料としては、平城京の地図、東大寺の盧遮那仏、山上憶良の貧窮問答歌等があげられる。農民の生活を知るには、山上憶良の貧窮問答歌が適当な資料となるが、それに関連して木簡の写真をもう少し大切に扱ってはどうか。この木簡により、どこで何が税として徴収されたかを知ることができる。また、そればかりではなく木簡が出土した所、すなわちその木簡がどこに捨てられていたか、を知ることにより、税を消費した人物と農民との関係を、はっきりさせることができる。これにより、生徒の理解もより一層深まるのではないだろうか。

3. まとめ

ここで、先程の藤ノ木古墳に中学生が侵入した事件であるが、ここに社会科の指導の中の、大きな落とし穴があったのではないだろうか。社会科の指導の中で、資料として埋蔵文化財を扱う。これにより、生徒は興味・関心を持ち、理解しようとする態度も表れてくるだろう。しかし、社会科の指導において、埋蔵文化財は歴史的、社会的に非常に価値の

高いものであることを、理解させる指導が弱いのではないだろうか。物質文化の溢れる現在の社会に育った中学生に対しては、授業の中で教師がしっかりと指導しなければならない。また、歴史学習は、過去を知った上で、よりよい社会を作っていくためのものである。その点でも、埋蔵文化財のみならず、他の文化財も大切にしていく意識をもたせるための指導が必要である。

教師が、教材研究を十分にしなければならないのは、当然のことであるが、埋蔵文化財といわれる資料を授業で使う場合、特にしっかりと研究しなければならない。なぜならばそれを使うには専門的知識が必要になってくるからである。しかし、生徒の理解を深めるには、充分魅力ある資料である。教材研究にかけた労力と時間よりもはるかに多くの成果を得られるだろう。

将来、私が学校教育現場に戻った時には、資料として埋蔵文化財を多く使い、生徒の理解を深めることができる良い授業をしていきたい。

(やぎ・あつゆき＝当センター調査第2課調査第3係調査員)